



主夫はシェフになれるか

八坂 里四

主夫予備軍というか、主夫の見習いとなつて二年余が経つ。

自らに課した仕事は、食後の洗い物、洗濯、掃除である。洗い物と洗濯は、水音が伴う楽しい仕事だ。済ませると、きれいに片付くのは気持ちがいい。掃除はきれいにないことにすると、しなくとも別段不都合はない。この点が掃除を自分の仕事とするには時間が掛かった。

それぞれのコツなり、勘所をつかんだよ
うな気がしている。

.....

食器を洗うと次は拭く作業だ。この時、水切り容器の食器をすぐに拭かず、少し間をおく。だが、間をおき過ぎても具合が悪い。水気が少々残っている内に拭くと水垢が付かないし、洗い落とせなかつた汚れも拭き取れる。洗濯物を洗濯機から取り出す時は、干す逆の順に籠に移すと物干しに掛ける際にラクだし、掃除も気分が乗らない時は四角を円く掃いて済ませる。

家の者も褒めてやらせた方がよいのであつて多少のことは無視しているのだから、いずれも評価もそれなりである。

.....

彼女らの評価がよいとしても、主夫見習いとしては炊事ができないことに負い目を感じ始めた頃、市が開催する「お父さんのエプロン教室」の知らせを回覧板を見て、早速申し込んだ。募集人数を上回れば抽選と言われたが、関門をくぐり抜け、毎週木曜日に計四回の料理講習を受けることになった。

ひとテーブルに四人、五テーブルの合計二十人の生徒である。「お父さん」というより、「お爺ちゃんのエプロン教室」の感である。

腰に着ける前掛けを持っていったが、首から吊るす胸までのエプロン姿の人が多い。ハンカチらしき小さな布で頭を包んでいる人が半分ほどで、私のように、頭が大きくハンカチでは収まらないか、照れ臭い人は、手拭いかタオルで頭を包んでいる。

